

## 「テロ対策」特集にあたって

なか じゅん  
中 村 順†

テロ対策の特集号を刊行することが、今までの安全工学誌の中ではあまり目にしない少し異なる分野だと思われるだろうか。少なくとも安全工学会会員の中でテロ対策に直接携わっておられる方はそう多くはないと思われる。

米国の9.11同時多発テロ以降も、多数の人間を殺傷するテロが世界各地で発生している。IS国グループやアルカイダグループなどのテロ組織が、SNSによって信奉者を作り、テロの実行者にする現象などが相次いでいる。

テロの実行方法に関する情報がすぐ手に入れられるようになり、それらに基づく欧米の先進国で起こっているテロは、わが国でもいつ起こっても不思議ではない。

一方、テロ対策もソフト面、ハード面ともに充実しつつある。テロに使用される爆発物を探知して未然に防ぐことや、爆薬や化学剤を合成できないように原料を規制すること、テロに脆弱なインフラを強靱なものに替えること、テロリストを生まない社会をつくることなど様々なことが考えられる。

テロを防止することや、起こっても被害を軽減するためには、最初に、テロについてその手段、方法などを理解して、適切な対策を取ることができるようにすることが必要である。

その中で、安全工学的な考え方がテロと戦うためのツールとなりうると考えている。事故の原因について調査、分析を行い科学的に解明し、深層原因を明らかにし、事故の発生を未然に防ぐこと、事故の再発防止策を立てることなどは、いずれもテロ対策にも当てはまることである。事故に強い人・設備は自然災害やテロにも強いともいえる。

わが国でも1970年代には、圧力釜、消火器、鉄パイプを使用した爆弾が頻繁に起こった時代を経験している。爆薬として使用されていたのは、除草剤に可燃物を混ぜたものや花火を使用した手製爆薬であった。

この塩素酸塩爆薬の性能や分析方法は当時あまり知られておらず、爆発特性の測定法の確立や最新の分析装置を導入するなどして、対策を検討した。その結果として、除草剤を爆薬原料とさせない組成の開発、人への有害性の試験など多くの関連した研究が行われた。

除草剤の品質改良、法的規制の追加、市販品の大量購入の制限などテロを防ぐ対策がとられた。その後、わが国では大きな爆弾事件の発生をみなくなった。

地下鉄サリン事件は、市民相手に毒ガスが初めて使われたということで、わが国ばかりでなく、世界を驚かせた。ここでもテロの再発防止のためにあらゆる検討と対策の実施がなされた。

既に、火薬学会爆発物探知専門部会では、2016年に爆発物探知のみでなく、CBRNEテロ対策（C：Chemical, B：biological, R：radiological, N：nuclear, E：Explosive）に携わる人たちのために必要な事項について解説し、資料を載せたハンドブックを出版した。その後も行政官庁、大学、研究所、重要インフラの保安警備、メーカーなどの担当の方々とセミナーを通じて情報交換を行っている。

今回の特集にあたってはこれらの専門の方々に協力いただいた。テロの一般的なことから、探知機材、テロ対策機器・設備、テロ装備機器、警備関係機材、爆発威力、シミュレーション、人的被害、緊急医療対処など幅広く分かりやすい解説を書いていただいた。なるべく多くの分野に渡った内容を心がけたが、公開することが難しい分野もあった。

世界でもテロ対策には最先端の科学技術が使われ、その進歩も早い。本の出版前後の2015年から16年にかけても、わが国も含めて欧米先進国で想定外の爆発物を含むテロ事件が発生した。過去の書物を再録するのではなく、なるべく最新のものを入れるようにした。本特集号がより社会の安全に役立つことを期待している。

†（公財）総合安全工学研究所：〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町3-5-2